

# 大学院修了にあたって

## 大学院修了にあたって

歯周診断・再建学分野 山宮 かの子



あつと言う間の4年間でした。この4年間は歯科医師としての私の生き方を方向付ける大切な時期となりました。私は大学院入学に当たり、二つの目標を立てました。一つ目は、歯周病を診断、治療できる能力を身に付けて歯周病専門医取得を目指すこと、二つ目は歯周病臨床に密着した臨床研究を行い、その成果を国際学会、国際論文で発表することです。臨床については、まだ歯周病専門医は取れていませんが、今ではなんとか簡単な歯周手術を一人で任されるまでに至りましたし、後者の目標は三年次にAAP(アメリカ歯周病学会)で発表する機会に恵まれ、さらにJ. Periodontologyに論文掲載を達成できました。この4年間は自分の興味あることに没頭し充実した時間を過ごすことができたので、大学院に進学を選択したことを心から嬉しく思っております。しかし、どちらもここまで順調に進んだ訳ではありません。臨床に関しては、最初は、顎模型や豚顎を用いて手術や縫合の練習、天然歯で石膏模型を作り形成やエンドの練習をしました。患者様に対しては“奥田式ステップアップ”法に従いました。すなわち私の技量に合わせて難しい部分を先生が行い、私のできることを厳しい監督のもとで任せ、徐々にその範囲を広げていくという方法です。完全に二人がかりで診療行うという体制ですので患者様の信頼を損なうこともなく、何よりも単なるアシストだけに留まるのではなく自身で体験することが多いので、日々得るところが沢山ありました。そこから得られた事を忘れないように診療ノートを作り、その日の診療行為を逐一記載し添削していただきました。そのノート

も4年間で5冊に達し、私の宝物になりました。奥田先生からは、治療技術だけに留まらず、患者様に対する命がけの熱い想い、歯周病診療のおもしろさなどたくさんのご教授頂きました。研究に関してですが、培養骨膜シートを用いた臨床的歯周組織再生効果についてのテーマが与えられました。この方法はこれまで奥田先生の積み重ねてこられた再生治療のなかで最大の難関であった細胞治療への足がかりとなるものです。骨原性細胞が含まれるとされる骨膜を培養シート状になるまで培養します。2、3壁骨欠損部位に、従来法の多血小板血漿とハイドロキシアパタイト顆粒混合物を充填した上に、GTRのコンセプトを取り入れて培養骨膜シートを被覆するように設置して骨再生効果を期待するという方法です。被験部位の選択、規格化された診査法、実際の手術、統計処理等を通じて少しずつ臨床的エビデンスが構築されていく過程を目の当たりにして知的興奮を覚えました。そして3年目について目標であったAAPで、その成果を発表する機会が得られました。“Tissue Engineered Cultured Periosteum Sheets Combined with Platelet-rich Plasma and Porous Hydroxyapatite in Regenerating Human Periodontal Infrabony Osseous Defects”という題名でoral presentationを行いました。これまでも何回か国内の学会で口頭発表をしていたものの、英語で10分間のpresentationを行うということはさらに別次元の努力が必要でした。苦心惨憺して奥田先生と原稿をつくりあげたものの、それを世間に通じる英語で話しきることはさらにスキルが必要です。8月から3ヶ月間、声の出し方から始まり話のスピード、ポインターの使い方、立ち位置、予想質問に対する答え方にいたるプレゼンのトレーニングを行いました。渡米一週間前の医局会の予演会では、緊張して早口になってしまったという失敗がありましたので、本番では聴衆を睨みつ

けるようにしてゆつくりと説明を行いました。その後の質疑応答もなんとかこなしましたが、自分の言いたいことが英語でどれだけ外国の皆さんに伝わっているか不安でした。しかし、何よりもうれしかったのは、ホテルのエレベーターの中で、知らない方から、“Good presentation!”と握手を求められたことです。私の発表を聞いて覚えてくださったことに感激いたしました。これは、oral presentationでなければ得られなかった貴重な経験でした。プレゼンターとしてのサーティフィケートをいただいたのですが、そのサインがあつた“Miller の分類”の Dr. Miller だったことも感激しました。

これまで本当に親身になって診療・研究を御指導いただいた奥田一博准教授に心から感謝いたします。さらに大局的見地から絶えずサポートして下さいました吉江教授、研究のアドバイスを頂戴した大島教授、川瀬准教授、天谷准教授に深謝いたします。また、出張や実験でお世話になった医局の先生方、患者様のことでご支援いただいた外来のスタッフの方々に感謝の意を表します。

## 大学院を修了するにあたって

矯正歯科学分野 小原 彰 浩



さて、困つたものである。この文章の依頼を受けている時点において、一方で僕は卒業論文をセッセと書いている状態つまり修了（予定）だからである。そんな僕が書いていいのか？ 果たしてなんて書けばいいのか？ ごちゃごちゃ悩んでもしょうがないので、大学院修了という一つの節目に大学院でしてきたことなどを書いてみることにします（なんだかこういう文章、ほんとと節目ごとに書いている気がする。大学入学、大学卒業、そして今回。文章うまいわけでもないのに。まあ、お付き合いください。）。

さて、僕の大学卒業後の4年間について。僕は大学を卒業後、まだ新潟に残り、矯正科の大学院に進む道を選びました。大学で6年間学んで、さ

らにということで迷わなかったわけではないのですが、矯正をしっかりと学びたいという気持ち先行での決定でした。矯正科に無事入ると、新しいことを始める時にはなんでもそうなのだろうけれど、やはり大変な日々が待つてました。昼間は、外来診療に出て診療、師匠の先生にみてもらったり、ついて見学したりといった臨床のトレーニングの時間。後の時間が大学院生としての時間で、それこそ大学院生の本業でもある研究をしたり、外来の技工をしたりの毎日でした。研究では、「下顎骨後方移動術前後における顔面口腔周囲軟組織形態の三次元的変化」というタイトルで4年間やってきました。顎矯正手術によって下顎骨を移動させた時、手術の前後で顔面の軟組織の形態がどれだけどのように変化するか、これを顔面と歯列模型の三次元的な形状を撮影することができる特殊なカメラを使って作った対象者の顔の三次元モデルで調べようというのが研究の内容です。自分から興味を持って臨んだ研究ではあるものの、内容からおおよそ予想つくとは思いますが、パソコンありきな研究でものすごいデータの数と格闘することになり、大変な日々5割増し。また、その研究の世界に踏み込んで行けば行くほど、三次元を真面目に相手にするということの難しさに直面させられ（普段、三次元の世界に生きている人間が言うのも変な話ですが）、これまた大変な日々倍増になってしまったわけです。この研究も昨年の秋には学会でポスター発表をして、今は、文頭でも説明した通り、学位とその後、雑誌に投稿するために論文を書いている状態です。たくさん、「大変な日々」と書きましたが、それは、どの道に進んでも同じこと、それより、4年間総じて考えてみて、大学院4年間だからこそ得られた多くのことを今後に生かしていけたらと思います。最後に、僕の大学院修了後の進路についてであるが、外には出ず、まだ矯正科に残る予定です。卒業のイメージが湧かないのはこのせいなのだろうか。

昨年の暮れ、大学の同期の友人数名で集まる機会がありました。不定期ではあるが、よく会う仲間です。お酒を呑み交わしながらお互いの今の現状や考えてることとか真面目なことも、それじゃなくても、どうしようもない馬鹿話も話せる仲間です。今回、集まって、お互いの歯科の症例と

か仕事を見せ合う機会があつて、研究のこととか話してきました。教えあつたり、率直に意見を言い合つたり、そんな仲間の雰囲気がいいなあと思いました。ずっとお互いの刺激となり合つていけたら、僕はそう思って、負けないようにこれからも頑張っていこうと思うし、今後もこういう関係を大切にしていきたいと思いました。

## 大学院修了にあたって

組織再建口腔外科学分野 外 丸 雅 晴



私のような者が、「大学院修了にあたって」というテーマで原稿執筆の依頼を頂くとは夢にも思っておりませんでしたので、締切を目前にしても緊張し、なかなか筆が進みませんでした。社会人大学院生として過ごしたこの4年間を振り返ってみたいと思います。

私は、平成11年に九州歯科大学を卒業し、群馬大学の口腔外科で卒業臨床研修を終えました。平成16年からは、群馬県高崎市にある黒沢病院（病床数98床の民間一般病院です）に勤務し、現在に至っております。現在の病院に赴任した際の頃です。研修医時代からの友人である、中里先生（当時組織再建口腔外科所属）から、新潟大学の社会人大学院制度について教えて頂きました。ちょうどEBMという言葉が商業誌でも盛んに使われ始めた頃で、朝から晩まで診療に追われる中、自分の臨床には、その裏打ちにエビデンスが乏しい事を思い知らされる毎日でした。そんな私にとって、日々の臨床と並行しながらアカデミックな環境に身を置く事ができる、社会人大学院の制度は大変魅力的に感じられました。勤務先の院長の理解も得る事ができ、平成17年4月に無事組織再建口腔外科学分野の大学院に入学する事ができました。

大学院入学後、まず印象に残ったのは、組織再建口腔外科での臨床を見学させて頂いた事です。上顎骨の骨切りや口腔癌の即時再建手術など、初めて目にした手術も多々あり、齊藤教授をはじめ

とする執刀医の先生方の正確かつスピーディーな手技など、ハイレベルな口腔外科臨床に触れる機会に恵まれた事は、私にとってかけがえのない大変貴重な経験となりました。

大学院2年目の後半からは、「口腔癌の頸部リンパ節転移」を研究の中心テーマとして、新垣准教授と顎顔面放射線分野の林教授にご指導を頂く事になり、超音波検査を中心に画像診断の実際を見学させて頂く機会に恵まれました。また、毎日の臨床で診断に苦慮した症例の画像を林教授に診て頂き、的確な診断とアドバイスを頂いた事も、自分にとって大変勉強になりました。新潟大学には、医学と歯学の蔵書が充実した図書館や電子ジャーナル、オンラインでの論文検索システムも整備されており、自分が常々感じていた知識不足を補う上でも、最善の環境と言えるものでした。こうした環境はやはり大学のような研究機関に所属しないと得られないものと感じております。また、大学との繋がりが得られた事もあり、昨年4月には、口腔生命福祉学科の第1期卒業生が私の勤務する病院に就職致しました。歯科衛生士不足が叫ばれている今日この頃、充実した教育を受けたポテンシャルの高い人材を確保出来た事は、勤務先の病院にとっても大変ありがたい事でした。

社会人大学院生という事で、組織再建口腔外科学分野、顎顔面放射線学分野をはじめとする新潟大学の諸先生方と勤務先である黒沢病院のスタッフに支えられながらの4年間でした。特に、齊藤教授、林教授、新垣准教授には、私のような経歴の社会人に対しても、大学院の門戸を開いて頂き、学ぶための素晴らしい環境を快く提供して頂いた事や、学会発表や論文作成などの研究活動に際して親切、丁寧にご指導を頂いた事などを本当に感謝しております。今後は、学んだ事を一つでも多く、患者様のため、地域社会のために還元していきたいと考えております。市井の臨床医であつても、日々の臨床データを蓄積、検討し、今自分の行っている治療の妥当性や問題点を明確にし、継続的に改善を行っていく姿勢が重要であると常々感じております。大学院に入学した事は、私に大きな「歯科医師としての生活習慣の改善」をもたらしてくれました。今後ともご指導、ご鞭撻の程、何卒宜しくお願い致します。